

## 夢の浮橋

小君は薫の使者として浮舟のもとを訪れ、薫の手紙を託すが、浮舟は人違いだと言って小君に会おうとせず、手紙の返事も拒む。

あるじぞこの君に物語すこし聞こえて、「物の怪にやおはすらむ、例のさまに見え給ふ折なく、悩みわたり給ひて、御かたちも異になり給へるを、尋ね聞こえ給ふ人あらばいとわづらはしかるべきことと、見奉り嘆き侍りしもしるく、かくいとあはれに心苦しき御事どもの侍りけるを、今なむいとかたじけなく思ひ侍る。日ごろも、うちはへ悩ませ給ふめるを、いとどかかることどもに思し乱るるにや、常よりもものおぼえさせ給はぬさまにてなむ。」と聞こゆ。所につけてをかしき饗などしたれど、幼き心地は、そこはかとなくあわてたる心地して、「わざと奉れさせ給へるしるしに、何事をか聞こえさせむとすらむ。ただ一言をのたまはせよかし。」など言へば、「げに。」など言ひて、かくなむと移し語れども、ものものたまはねば、かひなく、「ただ、かく、おぼつかなき御ありさまを聞こえさせ給ふべきなめり。雲の遙かに隔たらぬほどにも侍るめるを、山風吹くとも、またも、必ず立ち寄せ給ひなむかし。」と言へば、すずろに居暮らさむもあやしかるべければ、帰りなむとす。人知れずゆかしき御ありさまをもえ見ずなりぬるを、おぼつかなく口惜しくて、心ゆかずながら参りぬ。

いつしかと待ちおはするに、かくたどたどしくて帰り来たれば、すさまじく、なかなかなりと思すことさまさまにて、人の隠し据ゑたるにやあらむと、わが御心の、思ひ寄らぬ隈なく落とし置き給へりしならひにとぞ、本に侍める。

(夢浮橋)

【口語訳】

この家の主人（横川の僧都の妹尼）はこの君（小君）に話を少し申し上げて、「物の怪のせいでいらっしやるのでしようか、（浮舟は）いつもの様子に見えなさる時がなく、ずっと悪い続けていらっしやって、（出家して）お姿も以前とは違っていらっしやるので、お探し申し上げなさる方がありましたらとてもめんどろなことになるでしょうと、（浮舟の尼姿を）拝見し嘆き悲しんでおりましたその予想どおりに、このようにとてもいたわしくお気の毒なご事態がございましたことを、今はほんとうに畏れ多いことと思ひます。ふだんも、ずっと患っていらっしやるようですが、いつそうこのような（薫から手紙が来た）ことでお心が乱れていらっしやるのでしようか、いつも以上に分別がおつきにならない様子で。」と申し上げる。（小野という）場所柄にふさわしく風情のあるご馳走などを（妹尼は小君に）したが、（小君の）幼い気持ちには、なんとなく落ち着かない気がして、（小君が）「（薫が私を）わざわざ参上させなされたその証拠として、いったい何を（薫に）申し上げさせようとするのでしようか。ほんの一言でもおっしゃってくださいよ。」などと言うと、（妹尼も）「もっともなこと。」などと言って、（小君が言ったことを浮舟に）これこれそのまま取り次いで話すが、（浮舟は）何もおっしゃらないので、しかたがなくて、（妹尼は）「ただ、このように、はつきりしない（浮舟の）ご様子を申し上げなさるのがよいようです。（この小野は京から）雲のように遙か遠くに隔たつてもいない道のりのようでございますので、山風が吹いても、また、必ずお立ち寄りくださいませ。」と言うので、あてもなく日暮れまで長居をするもおかしなことであろうから、（小君は）帰ろうとする。（小君は）心ひそかに会いたい（浮舟の）お姿を見ることができなくなってしまったのが、気がかりで残念で、満足のゆかないままに帰参した。

（薫は）早くと待っていらっしやったところへ、（小君が）このようにはつきりしないで帰ってきたので、興ざめで、かえって使いなど出さないほうがよかつたと思ひになることがあれこれとあって、誰かが（浮舟を）隠し住まわせているのだろうか、（薫は）自身のお心の、あらゆる場合を想像して、（かつて浮舟を宇治に）捨て置いていらっしやった経験から（そのようにお思ひになった）と、もとの本にあるようです。